

2003 Biohistory's theme

愛づる

…この姫君の宣ふこと、
「人々の、花、蝶やとめつるこそ、はかなくあやしけれ。
人は、まことあり。本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ」とて、
よろづの蟲の、恐ろしげなるを取り集めて、
「これが、成らむさまを見む」とて、さまざまなる籠箱どもに入れさせたまふ。なかにも、
「烏毛虫の、心深きさましたるこそ心にくけれ」とて、
明け暮れは、耳はさみをして、手のうらにそへふせて、まぼりたまふ。…

01

「蟲愛づる姫君」

「蟲愛づる姫君」というお話をご存じですか。平安時代に書かれた短編集「堤中納言物語」の中の一つです。『京の町に蝶の好きなお姫様がいらっしゃる。ところがその隣の大納言の娘は、小箱に毛虫を飼って可愛がるのです。侍女は嫌がり、両親はお嫁に行けないと心配しますが「この毛虫が、皆がきれいという蝶になるのですから、本質はここに

あります。人間本質を見なければいけないでしょう」と言い、集めた虫の中で名前のわからないものには自分で名前をつけ、観察します。このお姫様は自然志向で、慣習であるお歯黒もつけず、眉も剃らず、髪を耳にかけ…』文学の中では、この姫君は変人、時には病人として扱われています。

しかし素直に読めば、生きものを見つめることにより、その本質を見出して愛づるというのは、生物研究の基本

です。明治時代にヨーロッパから移入したものだけを科学と考えず、1000年前の京にあった、生きものをじっくりと見つめ、それを愛づる姫君に原点を求めよう。実は困り果てているように見える両親も、姫君を心から愛していることが伺えます。愛づる心を持って生きものに接している者は、自身が愛づる対象になる。これがとても大事なのです。「生きる」ということを真剣に考えなければいけない。改めて強く感じるこ

の頃です。人間にとって大事なのはお金や力ではないはず。そのために生命をないがしろにする社会はゴメンです。ゲノム研究を中心にした生命科学も、うっかりすると経済や政治に巻き込まれて、「生命」という基本を忘れる危険をはらんでいます。なんとかしたい。そう思う中で「愛づる」という言葉に出会いました。見かけが美しいから愛するとか、衝動的に好きになるというのではなく、よく見つめて本質を理解すること

によって生まれてくる愛であり、それゆえに普遍的な表現ができるものです。明治の歌人、佐々木信綱は「歌の心は愛づるである」と言っていますが、日本人なら誰もがわかる気持ちです。生物研究も、その心を「愛づる」に置くことによって、生きものの理解をより深め、その成果を生命を大切にす社会づくりにつなげられるはずです。